古代史に遊ぼう

第 43 回 － 生駒山地を巡る 5）竜田から平群谷へ －

生駒山地西麓を南下して大和川と石川の合流点に近い、山地南端の史跡高井田横穴を前回は訪れた。そこから大和川を王寺まで遡り、支流の竜田川（生駒川）に入って平群谷を訪れれば生駒山地をほぼ一周したこととなる。従って今回は生駒を巡る旅の最終回である。

道路網が整備されていない古代では、河川を利用する水運は極めて重要であった。日本書紀に最初の遣隋使・小野妹子が隋使・裴世清を伴って帰国した６０８年（推古天皇１６年）、難波津に到着した一行は、船で大和川を遡り、三輪山の近くの海石榴市の港で上陸したと記されている。そこで問題は大和川の難所「亀の瀬」をどのように越えたかにある。大阪府と奈良県の境にあるこの難所は、宿命的な地滑り地帯で、近くは明治３６年、昭和６～８年さらに昭和４２年に北側の山地が大きな地滑りを起こしている。「亀の瀬」は両側から山が迫り巨岩が多く、水面から露出する岩が亀の甲羅を思わせ、短い区間だが急流をなしている。ここを船で越えることはまず困難であるが、後年郡山藩主片桐且元は年貢米を大阪に運搬するために、工夫して亀の瀬の上と下にターミナルを設けた。上流は平底の小型船を使い難所の手前でいったん陸揚げし、「亀の瀬」を陸路で越えた後、下流は剣先船（大阪の荷物運搬船）に積み替え輸送したのである。江戸時代にはこの積み替えの港はたいへん賑わっていたとのことである。古代の一行もこの方法に準じて、亀の瀬でいったん下船して陸路を通り、その上流で船を乗り換えて、遡って初瀬川に入り櫻井に出て、飛鳥京に向かったのであろうと推定されている。今の大和川の水量からは信じがたいことだが、この川が古代の最重要な水路であったことは紛れもない事実であった。

●写真：大和川 ・亀の瀬

●写真：龍田大社

亀の瀬を越えて上流に進むと、現在は生駒郡三郷町である。ここに風神の社「龍田本宮」（竜田大社）があり、祭神は竜田比古、竜田比女である。大和川は本宮の南を北東から南西に流れており、夏の南西風、冬の北東風は丁度この谷あいを通って吹く。この社の特色は拝殿の構造にあって、柱と屋根だけでの能舞台のような広々した板敷きで遮るものが何もない。拝殿で風神に祈って、ただただじっと風を待ち、風の音で神の訪れを感ずるのである。竜田比古は秋の男神とされ、春の女神である佐保媛と対をなしている。ここは秋には紅葉の名高い名所でもあり、現在は支流の生駒川が竜田川と呼ばれるようになったが、古くはこの辺りの大和川が竜田川と呼ばれていた。平安時代の小倉百人一首の在原業平「ちはやふる」や能因法師「嵐吹く」に登場する竜田川や三室山は、万葉以来の伝承的な文学的知識であって、地理上の実証とはかけ離れている様である。

「神奈備の　伊波瀬の杜の　呼子鳥　いたくな鳴きそ　わが恋まさる（巻８、１４１９）」鏡王女の歌である。「磐瀬の森」という神の居ます森の所在は諸説があって明らかではないが、今この句碑がＪＲ三郷駅近くの窮屈なふさわしくない場所に移設されていることは、万葉集愛好家の嘆きの種である。「竜田越」はこの歌の神奈備の森辺りを抜けて、難波へ向かう古道であった。奈良盆地にはよく知られているように、南北に上・中・下の三官道と山辺の道が通じ、西側を斜めに走る太子道、そして東西に 2 本の横大路が通っている。北の横大路は法隆寺の近辺から、南西に向かって大和川に添って丘陵地を越える「竜田越」となる。

この道は飛鳥と難波を結ぶ古代の重要な官道の一つであった。「竜田本宮」の近辺から、古道は峠八幡を越え雁多尾畑へと抜けていたようだが、現在は山の中腹のブドウ畑の中を高井田方面に越える道となっていると云う、但し今回踏破（走破）は果たせなかった。

大和路線ＪＲ王寺駅の回りで、北に円弧を描く大和川を遡り市街地を抜けると、北から竜田川が合流している。西側に三室山（標高８２ｍ）があり、現在では桜の名所である。三室山と呼ばれる山は地図上、亀の瀬の北・竜田大社の西にもう一つ存在し、こちらは標高１３３ｍとやや高い。竜田川上流の東側には城跡公園があり、川の両側にモミジが植栽されて、現代の紅葉の名所となっている。近くに後年に勧請された竜田神社も祀られている。真北に遡上し、竜田大橋、椿井を過ぎると平群谷である。東は矢田丘陵、西は生駒山地に挟まれ「隠国（こもりく）」とも呼ばれた谷を川は流れている。上宮王家の山背大兄王は蘇我入鹿の軍に襲われたとき、一旦この地に逃れたと伝えられている。

「平群の双墓」とよばれる、長屋王と吉備内親王の墓は、この谷の平地に並んで二つの森をなしていると記録にあり、一昨年からドライブの帰途２度通過して、それらしいものを探したが、簡単に見つけることが出来なかったので、今回はそれを目的として探訪した。予想したとおり双墓は住宅･道路の開発によって分断され、もはや双墓とは云えない状態であった。吉備内親王の墓は御陵苑という名の住宅団地に取り囲まれており、長屋王の墓の傍らを新しいバイパスが貫通、周りは御陵公園として整備されている。新調の石碑に「天武天皇皇孫・長屋王墓」とあり、短い参道の先の円墳には木が茂り小さな森をなしている。道路は曲線で吉備内親王墓に通じ、墓は王墓よりもやや高所にあって、参道の階段を登ると正面拝所がある。宮内庁による表示は「岡宮天皇皇女・吉備内親王御墓」とあり、なぜ長屋王妃としないのか、宮内庁の仕来たりなのであろうが、悲劇の主人公が寄り添っているという伝承の双墓にはそぐわないことである。ただし、考証によれば、長屋王墓とされている円墳は前方部が削られた後円部の残りで、築造年代は長屋王の年代より２００年も古いという、とはいえ、ほかに有力な墓の候補が示されている訳ではない。

長屋王の父は天武天皇の長子･高市皇子、母は天智天皇の娘・御名部内親王（元明天皇の姉）、吉備内親王は草壁皇子と元明天皇の子、兄は文武天皇、姉は元正天皇である。長屋王は藤原不比等の死後、右大臣に昇進し、聖武天皇が即位すると左大臣（首相にあたる）となった。７２９年（神亀６年）長屋王の屋敷は、不比等の３男、宇合の率いる兵によって包囲される。「密かに左道（妖術）を学び、国家（天皇）を倒そうとしている」という密告があったというのである。その２日後、王は妻と４人の男子を道連れに命を絶った。非皇族の光明子を皇后にしようとしていた藤原氏の障害になっていた、またその子等が「皇孫」とされ、後継天皇の候補の資格があったため一族が抹殺されたというのが、事件の真相であるとの説が有力である。謀反は冤罪ということは今では定着している。

日本武尊が歌ったという「命の全（また）けむ人は､畳薦（こも）平群の山の、熊白檮（くまかし）が葉を、髻華（うず）に挿せ､その子」という歌がある。伊吹山で荒ぶる神に傷つけられた尊が、伊勢の能褒野にたどり着いたとき歌った有名な国偲び歌「倭は国のまほろば、たたなづく青垣、山籠れる､倭しうるはし」に続けて歌われた歌で、さらに「はしけやし、我家（わぎへ）の方よ、雲居立ち来も」と結ばれたという。歌を現代訳すると「大切な命のまだ健やかな人は、幾重にも重なっている平群の山の､大きな樫の木の葉を、髪飾りにして挿しなさい､若い子らよ」となる。日本武尊の容体は急にあらたまり、苦しい息の下から「嬢子（おとめ）の床の辺に、我が置きし劔の太刀、その太刀はや」と歌い終わって亡くなられたと古事記に記されている。「くまかしの髪飾り」の歌は､歌垣で女性を誘うときのポピュラーな歌でもあると云うことだが、危急のときに尊にとって、平群は故郷の貴重な想い出であったと云うことが分かる。

その畳薦（たたみこも）という枕詞がかかる平群の山は、矢田丘陵であると歌の本に解説されているが、東側に矢田丘陵は見えるけれども、西側の生駒と信貴の山頂を結ぶ稜線のほうが遙かに雄大である。西は稜線が連なって視界を水平に横切り、その下には谷の切れ込みが幾重にも重なっていて、まさしく「畳薦」という感じである。歌本の解説者は、ここの景色を現場で眺めたことがあるのであろうか？平群渓谷は南に明るく開けており、遠く二上、葛城、金剛の山脈を眺めることが出来る。それらの山々は南への直線上に存在するため、二上山の雄岳と牝岳は重なってピークは一つにみえ、その奥に鋭角の三角形に葛城山頂が聳え、金剛山は葛城の西肩から頭を覗かせている。これは奈良盆地からの通常の眺めとは全く角度の異なった珍しい眺望である。写真は吉本吉彦氏にご提供頂きました､感謝申し上げます。

（岡野　実）